

---

『 YUE 』

徳次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『 Y U E 』

### 【Nコード】

N 2 9 9 6 E

### 【作者名】

徳次郎

### 【あらすじ】

ボクは毎晩妹の為に小さな布団を敷く。無口な父と母。古びた家屋。妹想いの少年には、自分が忘れ去った過去があった。思い出してはいけない過去、考えてはいけない今……短編連載全2話です。

## 【上】（前書き）

かなり抽象的な流れで進む話です。

深く考えずにお読みください…【上】編

## 【上】

黄褐色に劣化した古い畳は、所々がほつれてささくれ、擦り切れている。

床板が傷んでいるのか、継ぎ目のチリも合わず所々へこんで歪んでいる。

それでも横になった時に香る、干し草の匂いは変わらないのが不思議だ。

ボクは毎晩自分の布団の隣にもうひとつ小さな布団を敷く。

自分の布団より明らかに二周りほど小さい子供用の布団。

かけ布団にはデフォルメされたハムスターの絵柄がたくさんプリントされている。

妹の為の寢床だ。

押入れから出した布団は、どれもひんやりと冷たく気持ちいい。

ボクは冷たい敷布に頬を着けるのが好きだ。

妹は毎晩遅くに帰ってきて、日中は家にいない。

幼い妹が昼間どこで何をしているのか判らず、どうして夜しか家に帰ってこないのか、小学生に入ったばかりの僕には判らなかった。それでもボクは毎晩幼い妹の為に布団を敷く。

いつから自分が妹の布団を敷いているのか、それさえも覚えていないのだ。

話しはほとんどしない。

彼女が幼いせいもあるし、帰りが遅いせいもあるだろう。

何度か会話を交わしたが、何を話したかあまり覚えていない。会話にならない会話だったのだと思う。

妹の布団は、ボクとは違う匂いがする。

ミルクのようなイチゴのような穂のかに甘い<sup>かあり</sup>香氣は、彼女の匂いだ。

父は今時珍しい下駄職人をしている。

家屋と繋がる仕事場で、毎日来る日も来る日も下駄を造る。

下駄はひとつの木片から鑿ノミとカンナだけでその姿へ変わってゆく。ボクはその光景が好きで、何の変哲も無い木片が履きモノへ変わる様子は、青虫が蝶へんげに変化する様子に似ていると思った。

厳格な父は、ボクと言葉を交わす事はなかった。

物心がついて交わした会話もほとんど覚えていない。

茶の間から様子を覗くボクに気付いても、父は笑顔を零したりしない。

チラリと見た視線を直ぐに手元へ戻す。カンナの削る音はリズムカルに留まる事はなかった。

母は毎日掃除と洗濯をして、三食の食事を作るだけの存在だった。もちろん、ボクが幼児の頃は手を掛けてくれたのだろう。

でもボクにはその記憶は無く、気付いた時には無言でただご飯をよそってくれるのが母親だ。

友達の家の母親のように子供を叱る声もないし、頭をクシャクシヤと撫でる事も無い。

ボクにとってはそれが普通で、寧ろ友達の母親を気味悪く感じたものだ。

離れにある部屋は、去年亡くなったばあちゃんの部屋だ。

今は仏間になって、彼岸だったせいかここ数日は一際線香の臭いが漂う。

今朝学校へ出ようとしたら、玄関先に菊の花と線香が用意してあった。きつとひと山向こうのお寺に在る墓地へ、お墓参りに行ったのだろう。

ボクはお墓が好きではない。

あまりあの場所が好きな人もないと思うが、どうしてかあの場

所は落ち着かないのだ。

背中がゾワゾワして、周囲に人の気配をたくさん感じてしまう。辺りを見回すと、墓石以外は鬱蒼と茂る草木が風で揺れているだけなのに……

だからボクは、ばあちゃんの墓参りにも行つた事はない。四十九日に行つたのが最後だ。

ボクは今日も二組の布団を古い畳の上に敷く。

部屋の窓ガラスに大きな蛾が止まっている。

止まっているのは外側だが、ガラスからグロテスクな丸々とした腹が丸見えで、なお気持ち悪い。

ボクが窓ガラスを何度か叩くと、蛾は鬱陶しいようなそぶりでバサバサと不器用に飛び立っていなくなった。

妹は今夜も遅い。

いったい何処で何をしているのだろう……

ボクが朝目覚めると、彼女は既に布団の中にいない。温もりも残さずに何処かへ行ってしまふのだ。

穂のかに甘い残り香だけが、微かに布団に染み付いている。

古くて懐かしい香りだ。

妹が何処へ行くのか見届けてやろうと夜通し起きていたことも在る。

小さな布団で寝息をたてる気配だけが、ひたすら夜気に染み渡る。愛おしく懐かしい気配だ。

しかし、朝陽が昇る頃になるとボクはウトウトして深い眠りに誘い込まれてしまう。

けっきょく何度か試みたが、妹が部屋を出るまで起きている事はできなかった。

父と母は知っているのだろう。

何も言わないが、何も言わないところを見るとやっぱり知っているに違いない。

ボクより幼い妹が日中ずっといない事を、心配しないのもおかし

い。

おかしいから尚の事、ボクは両親に問う事は出来なかった。

\* \* \*

細い雨が静かに降り注ぎ、山の景色を霞ませた。

「アイス食べたい」

彼女は小さな赤い傘の下で言った。子供用の小さな傘に、妹はすっぽりと納まる。

「今日は雨だし、少し肌寒いよ。風邪ひくぞ」

「ひかんよ」

三つ編みのお下げを振る。

「また今度な」

ボクは傘を持つ手を取り替えると、赤い傘の下に向って手を伸ばす。

小さな丸い指が、ボクの指先を掴む。

「今度な。ゼツタイな」

赤い傘を少しだけ傾けて、彼女はボクを見上げる。

新鮮で、潤いのある白桃のような頬で笑う。

「ああ」

ボクは目を細めて見下ろし、笑い返す。

糸のような雨は、音も無く傘を叩いていた。

深い緑が雨の糸に溶け込んで、微かな霽もやが木々に絡みつき静けさを縛り付ける。

道端に咲いた彼岸花が、赤色に水を滴らせていた。それは、小さな赤い傘をさす妹の姿に重なった。

雨の中を妹と歩いた記憶は無いのに、何故か思い出す。  
どこか懐かしい。

それは勝手にボクの頭の中へ運ばれて、勝手に再生される解読不能な光景だ。

満月の光が煌々と部屋を照らす夜。

ボクはこんな日はカーテンを半分だけ開けて、月影を部屋に招き入れる。

妹の顔がはつきり見えるのはこんな時だけだ。

ボクは布団に入って彼女の帰りを待つ。

静かな気配と共に、彼女は布団の傍らに立った。

いつの間に部屋の戸を開けたのか判らない。

「お月さん、綺麗だよ」

「ああ……そうだな」

ボクは布団から顔だけを出して、妹を見上げた。

月光を半身に浴びた彼女の肌が白く輝く。

大きな向日葵の絵がプリントされたワンピースは彼女のお気に入りだった。

黒目がちな大きな目はクリクリとボクを見下ろして笑う。

無邪気で、純粹な笑みだ。

彼女はそんな笑みから、眉をフニヤリとしかめる。

「飴食べたい……」

「飴？」

妹はコクリと頷く。

短い首に小さなシワが入って、三つ編みを解いた黒髪が頬の横で揺れる。

ボクは布団から起き上がって肩をすくめた。

両親が起きないようにそっと部屋を出ると、台所にある飴をひとつ取って来る。



メロンの絵柄が包み紙に描いてあるから、きっとメロン味なのだろう。

「虫歯になっちゃうぞ」

ボクはそう言っ、妹の小さな手に飴を渡す。

開いた指がムクムクとして関節などないような、小さな手だった。柔らかい……

「大丈夫。ウチ、虫歯にならんよ」

彼女はニツと歯を見せて笑う。白くて綺麗な乳歯が小さく並んでいた。

「食べたら、歯磨きしてから寝ろ」

「うん」

彼女は再びコクリと頷いて笑った。

楽しそうに、嬉しそうに包み紙を解いて、飴玉を口へ放り込む。

小さいはずの飴玉が、彼女の柔らかい右頬をプクリと膨らませた。月影が白く輝いて、凸凹の在る古びた畳の上に浮かぶ陰影は、まるで月面のような。

そうだ……そう言えば、以前言葉を交わしたのも満月の夜だった気がする。

妹は満月の夜だけボクに話しかけてくるのだ。

それ以外の日は、黙って静かに布団へはいると直ぐに寝息をたてる。

ボクはまどろみの中で、彼女の微かな寝息を聞く。

それが何故なのか、ボクは不思議には思わなかった。

そんな事以上に、妹が日中何をしてなんの為に家にいないのかが謎だったから。

ボクとは幾つ違うのだっけ……？

最近ボクは混乱する。

ボクは既に小学四年生になったと言うのに、妹の風貌は変わって

いない気もする。

それとも、自分と同じだけ歳をとるから、ボクから見た妹の姿と  
いうのは何時までも変わらないものなのだろうか……

そんな事を考えている間に、ボクは深く心地よい眠りに落ちてゆく。

何時の間にか妹は布団へ入っている。後ろ髪が枕に柔らかく落ちてたわんでいた。

明日も学校だ……………

## 【上】（後書き）

お読み頂き有難う御座います。  
次回【下】編です。

【下】

夏休みが迫っていた。

それだけでボクたち子供の心は浮ついて、夏空に追い立てられるように高揚する。

父の作業場からは、今日も鑿<sup>ノミ</sup>を叩く音が聞こえる。

庭の物干しには、暑い陽差に洗濯物がはためいていた。

縁側には古びた金魚鉢が置いてある。

夏空から注ぐ陽差が、丸いガラスに反射して光の玉を取り込んでいるようだ。

確かあの水槽は、妹と一緒に出かけた縁日ですくって来た金魚を飼う為に用意したものだ。

と言う事は、ボクは彼女と出かけている。

その頃は妹も寝る以外の時間に家にいたと言う事だ。

それとも、その日に限って家にいたのかもしれない。

ただ、それが去年の事か、三年前の事なのか……それとももっと昔の事なのか思い出せない。

ボクは金魚鉢に水をたつぷりと注ぎ込んだ。

揺れる水面に、小さなボクが映る。眩しい太陽の陽と一緒に揺れていた。

この中で元気に泳いでいた金魚はどうしたのだろう。どうせ一週間くらいで死んでしまったに違いない。

生ぬるい風を受けた庭木が音を立てた。山茶花の木から注ぐ木洩れ日が揺れている。

視線を足元に戻すと、ふとボクの目に停まったのは縁側の下にある小さな木箱だ。

古いリンゴ箱のようで、しっかりした造りだが黒く角が朽ちている。

引っ張り出してみると、そこには紅い小さなバケツや緑色のプラ

スチックのシャベルが在った。

色あせと土で汚れている。

そして、くすんだピンク色の小さなサンダルが奥に押し込まれていた。

これは妹のものだ。

プラスチックの小さなバケツもシャベルも、そしてサンダルも。

昔は陽の光の下で遊んでいたに違いない。

そう言えば、ボクも一緒に遊んだかも知れない。でもボクはそれを思い出せない。

陽差がボクの首筋を容赦なく焼いた。

熱い。

垣根の外から章太が呼んでいる。夕方まで近くの河原で遊ぼうと言っただ。

日曜日の午後、ボクは玄関に廻って運動靴を履くと、そのまま外へ飛び出した。

夏休みを待ちきれず、ボクらは駆ける。

蒼く澄んだ夏の大きに追い立てられて。

家から畑の間を縫うように自転車で少し行くと、狭い国道に出る。国道沿いのカーブを四つぬけると少し落ちた土手の下に河原が在る。河原の上にはコンクリートの橋がかけられ、向こうの林へ抜けている。

車道から一段降りたその場所は歩行者専用で車は通らない。

夏になるとその橋から川へ飛び込むのが恒例の遊びなのだが、ここ数年は橋が壊れて立ち入り禁止になっていた。

数年前台風が直撃し、川は氾濫、土砂崩れが起き、その土砂と濁流が橋げたを破損させたのだ。

数年ぶりにそれが修復されて、子供たちは夏の暑い陽差を待ちわびていた。

どうして橋の修復が遅れたのか、子供のボクたちには判らない。クラスメイトの昌彦の父親が言う話では、市の公共事業費が足りなくて予算が廻らなかつたらしい。

そして、数年前に水難事故を起こしたこの場所は、このまま取り壊してしまおうかと言う議論にもなったそうだ。

悪い噂はあった。

コンクリートの橋は修復されても、もう上から飛び込む事が出来ないんじゃないか。

子供は立ち入り禁止になるのではないか……

しかし橋にはそんな立て札は無かった。

でも噂は当たっていた。

新しい橋には両側に鉄の柵が設けられて、飛び込めなくしている。ボクらは別に、自殺志願者ではない。

水に飛び込むスリルを純粋に楽しんでいるだけだし、多少の危険は子供だって判っている。

子供はこういう遊びの中で、自分の出来る事と出来ない事。向き不向きなどを得とくするのだと思う。

そして、些細な勇氣も。

章太とボクは手すりに掴まって、流れる川の水を眺めた。

橋の上には、少し前に来た連中が同じように川を見下ろしていた。河原で残念そうに水遊びする連中もいる。

広い河原に対して水の流れはそれほど広くは無い。中流のここは川下と川上にある小さな堰せきのおかげで流れも緩く、中央は意外と深い。

もちろん、ある程度の深さがあるから飛び込めるのだが、もちろん河原の浅瀬で水遊びする連中も多い。

この橋が使えなくなってから久しぶりにここへ来た。透き通る緩い流れは以前と変わらず陽光に煌いていた。

あちらこちらで魚が跳ねる。

そんな水面を見下ろしていると、ボクの頭の中に何かが入り込んでくる。

それは、実体を捉える間も無く一瞬で薄れて消える。

河原の周囲に茂った雑木林から、セミが鳴き始めていた。

いつかの夏の日々が薄靄うすもやに埋もれて蘇える。薄靄は何を覆い隠しているか解らない。

セミの声……流れる水の風景……

「久しぶりだよな」

章太が川の流れを見つめたまま言う。何故が無表情だった。

「ああ……」

「誘っていいのか迷ったけどさ……」

何故迷うのだろう。章太は何に迷うのだろうか。

確かに友達とここへ来たのは、かなり久しぶりな気がする。

「なんでだよ」

「何でって……由江ゆえちゃんの事がさ……」

由江？ 聞いた名前だった……誰だっけ？

白い靄の中にその言葉の響きだけが何度も響き渡る。

だれだ……？

「由江って？」

「お前、覚えてないのか？」

章太は顔を上げると、驚いてボクを見つめた。

不可解さの染み出る、困惑の笑み。

「あの頃の記憶を無くしたって、本当だったんだ……」

「帰りにアイス買おうな」

暑い陽差のなかで、大きな向日葵のプリント柄ワンピースを揺ら

して彼女が言った。

「ああ、今日は暑いしな」

小さな手がボクの指先を掴んだ。

ギラギラした陽差と緑の木々から、セミの喧騒が漣さざなみとなって蘇える。

幼い妹の汗に混じる、ミルクのようなイチゴのような甘い香氣かおり。  
あれは何時だったのか？

焼きつくような陽差の下で、妹と歩いていた。

ボクは何時、彼女と一緒に出かけたのだろう。

章太はボクの中で霽もやに包まれた全てを、静かに語ってくれた。

どうして両親は説明してくれなかったのか？ 説明されたけど、

忘れてしまったのかもしれない。

由江はボクの二歳違いの妹だ。

四年前、一緒に河原へ来た。

太陽が照りつける夏空は何処までも蒼く、透き通るように輝いていた。

山の向こうから大きな入道雲が、とぐろを巻いた龍のように雄々しく虚空に立ち昇る。

止め処ないセミの声は、暑さに浸食されて景色に同化していた。

ボクは由江に橋の上で待っているように言い聞かせる。

その頃のボクだって、頑張っててなんとか橋の上から川へ飛び込むのに精一杯だっただろう。

章太は河原の水辺から、飛び込むボクを見上げていたらしい。

何かあれば周囲にいる上級生が助けるのがこのルールだ。

しかし由江には気がいかなかった。誰も五歳の彼女が飛び込むなんて思わなかったのだ。



数人が同時に飛び込めば水音は喧騒となって周囲を湧かせる。喝采の間も無く、次々に飛び込む飛沫が上がる。

その中に由江の姿があった事など誰も気付かなかった。

彼女はボクを追いかけたのだろうか？

気付くと妹は何処にもいない。

ボクは夕暮れまで彼女を探した。

直ぐに役場の連中や消防署、警察の人たちが来て一緒に探した。

一週間経っても由江の姿は見つからなかった。

下流の堰で、ピンクのサンダルだけが唯一見つかったそうだ。

その夏の終わり、大型台風が直撃して五十年振りの災害をこの川とその周囲にもたらした。

土砂は崩れ、川は氾濫し、橋げたは半壊する。

それでも由江の姿は見つからなかった。

時間だけが、月日だけが無常に過ぎて周囲の姿形を変えてゆく。

彼女は死んでしまったのだろうか。

それとも、今も何処かで家族が見つけてくれるのを待っているのだろうか。

それが解らないからきつと、ボクの家には由江の仏壇がないのだ。両親はいつまでも妹の生還に望みを紡いでいるのかもしれない。

その頃の記憶はボクの中から綺麗にぽっかりと抜け落ちているらしい。

話を聞いても臍に霞む記憶は戻らなかった。

丸い指先……白桃のような笑顔……

薄靄に包まれた妹の記憶。

「この事、話しちゃいかんって言われてるから、俺が言った事は内緒な」

章太は鉄柵に寄りかかって、ボクの肩に手を置く。

友達も気を使ってその話題にはずっと触れなかったし、父兄会でそう子供たちへ指導するよう取り決めがあったそうだ。

おそらくボクの父も母も……

凪いだ風が蒼穹<sup>そうら</sup>に浮かぶ雲を留めている。まるで時間が止まったようだ。

遠くでトンビの声が響くと、ボクは止まった時間から抜け出す。眠りから目覚めた時のように、陽差が眩しくて目を細める。

でも、だとしたら……

ボクはいつも誰の為に布団を敷いているのか？

毎晩帰って来てボクの隣で小さな寝息を立てる彼女は、誰なのだろう。

了

【下】（後書き）

最後までお読みいただき有難う御座いました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2996e/>

---

『 YUE 』

2010年10月8日15時42分発行